

「過ち」と「謝罪」～「呻吟語」に学ぶ

過(あやま)ち有るは是(こ)れ一の過ちなり。過ちを認むるを肯(がえん)ぜざるは、又た是れ一の過ちなり。一たび認むれば則(すなわ)ち両過都(すべ)て無し。一たび認めざれば則ち両過免(まぬか)れず。彼(か)の強弁して以(もつ)て非を飾る者は、果たして何の為ぞや。

呂 新吾

今月の理事長ブログを始めるにあたり、今年一年の関係各位のご支援、ご協力及びご尽力に対し、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

さて、今月の言葉ですが、以前にもご紹介したことのある「呻吟語」(湯浅邦弘著 角川ソフィア文庫)から取り上げてみました。大意は、「過ちを犯すということはすでに一つの過ちである。それを過ちだと認めないのは、さらにもう一つの過ちを犯すことになる。ひとたび過ちを素直に認めるならば、その二つの過ちはなかったことになる。[逆に]その誤りを認めないのであれば、二つの過ちを犯すことになる。あの強弁して自分の非を認めようとしなないのは、いったい何のためなのか」となっています。

年の瀬を迎え、今年一年を振り返っている方も多いと思いますが、この「振り返る」という行為は、人間の成長にとって大事なものの一つだと思っています。振り返る中で、後から色々と反省することもあると思いますが、これも一種の「学習」であり、成長の糧なのではないでしょうか。また、「失敗は成功のもと」とも言います。今日の科学的成果や発展も、こうした失敗の積み重ねで出来ているといっても過言ではありません。

冒頭にある「過ち」も「失敗」と相通ずるものがあります。「ヒューマンエラー」という言葉がありますが、これは人為的過誤や失敗のことで、JIS 規格では、「意図しない結果を生じる人間の行為」と定義されています。この「ヒューマンエラー」は、誰でも起こしうることであり、仕事上の「ヒューマンエラー」を防止するために、数々のマニュアルや手順書などが作成されているわけです。

しかしながら、マニュアルどおりにやっていたつもりでも、その時の体調や突発的な出来事などにより、実際にはマニュアルどおりに行えていなかったといったことは比較的事あることです。そのようなときに、もし「過ち」に気付いたら、直ちに事情等を上司に報告した上で、適時に謝罪することが、職業人、組織人に求められる姿勢、行動と考えられます。その際、冒頭の言葉にもあるように、「過ち」を認めないような態度は、「過ち」をさらに重ね、ひいては単純なミスを事故・不祥事にすることにも繋がります。

一方で、最近の報道や SNS 等を見ると、自己の過ちや誤りを認めず、「誤りを認めることは負け」、「謝罪すれば、認めたことになる」といった風潮が、一部で大変強いような気がしてなりません。今年の 10 月の本ブログでユヴァル・ノア・ハラリ著「NEXUS 情報の人類史(上・下)」をご紹介しましたが、その中にあるように、人間の社会を健全に保っていくためには、「自己修正メカニズム」が必要であり、その前提となるのが、まさに「過ち」を「過ち」として認めることではないでしょうか。もちろん当人には、色々と言いつ分はあるかもしれませんが、客観的な事実等に基づき「過ち」を犯したと認められる際には、そのことに真摯に向き合い、「謝罪」をすることが、当人はもとより、健全な組織や社会を維持する上で望ましいことであると思います。

令和7年(2025年)12月



一般財団法人 かながわ水・エネルギーサービス
理 事 長 松 井 聡 明